

アジア読本モンゴル

著者	小長谷 有紀
発行年	1997-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10502/4582

小長谷有紀

モンゴルといえはチンギス・ハーン、はたまた騎馬遊牧民。そんな紋切り型のキャッチフレーズ以外に、私たちはいったいモンゴルの何を知っているだろうか。

本書は、変わりゆくモンゴル国を多角的にとらえるための入門書である。

モンゴル国は、中国とロシアという二つの巨大な国のはざまにあって、二〇世紀に大きな世界史のうねりを二度経験した。東欧諸国に先がけて世界で二番目に、幸福の正義をうたった社会主義の実験場となり、東欧諸国にやや遅れてその社会主義を捨てた。

そんな国の未来を考えるうえで、とりわけ日本との関係において考えるうえで役立つことを願って、比較的若い執筆者たちに協力を依頼し、各章を構成した。

この「いざない」につづく、「ふるさと」の章は、草の海として知られてきたモンゴル高原での人びとの生活風景を伝えるためのスケッチである。それは、私たちにとってごく一般的なイメージであろうと同時に、モンゴル人自身にとっても原風景である。この原風景は現実に生きられている一方で、都会に住む

人びとにとっては、もはや思い出と化している。草の海だけでは捉えきれないモンゴルを伝えるために、本書の構成は続く。

「まなざし」の章は、モンゴル国を大局的に理解するうえで役立つ、複数の視座を提供する。歴史的蓄積、歴史的過程、民族的広がり、民主化の今日的状況などからなっている。モンゴル国の現在を時空間に布置するための章である。

モンゴルの一般的な歴史に関しては、近年続々と刊行されている優れた歴史書にゆずり、本書では、モンゴル国に現存する遺跡を通じてモンゴル高原に展開した諸民族の遊牧世界をかいまみる。言い換えれば、そうした有形の遺跡とともに無形の文化遺産をもふくめて遊牧世界の歴史的蓄積を今日にうけついでいるのが、モンゴル国なのである。

モンゴルの歴史的過程を明・清代にまでさかのぼったのは、国家としての枠組みのルーツを理解するためである。過去のできごとが人の性格に影響をおよぼすのと同様に、国にとっても歴史のない現在はない。

逆に言えば、現在の一瞬一瞬もまた、やがてまもなく歴史と化してしまうことであろう。民主化以降の政治・経済については、刻々と移り変わる時の断面をできるだけ詳細な事実によって紹介している。いわばなまものであるため、取扱いには注意を要するといえよう。

このように本書には、モンゴル高原で営々と築かれてきた歴史的所産に関する部分と、新しい胎動に関する部分とが縫合されている。草原の暮らしを再構成した「ふるさと」の章は、どちらかといえば前者に属すであろうし、もっぱ

ら都会の暮らしに関わる「ゆさぶり」の章は、後者に属すといえよう。しかしながら、歴史的所産と新しい胎動はつねに互いに密接な関係をもつものでもある。伝統は再生し、新しい「きらめき」を放っている。

こうした複数の多角的な照射によって、モンゴルの実態像がうかびあがってくるにちがいない。

本書ではさらに、「ささやき」と題してモンゴル人自身による語りをちりばめた。作家や詩人など自ら筆をとる人びとの「へかたり」と、決して自らは筆をとらないであろう人びとの「へつぶやき」とがある。二〇世紀にここで何が起っていたか……正義に翻弄ほんろうされた経験を二一世紀へ語りつぐことは、私たち人類の歴史的使命であると思う。とりわけ自ら筆をとらないであろう人びとのつぶやきは、いま聞いておかなければ、二度と聞くことはできないであろう。本書ではほんの小さな試みにとどまっているが、重要な意義をもつ出発点だと考える。各章で論じられている事象について、肉声の証言を得ることができよう。

本書の最後「たびだち」の章では、日本の援助、開発、投資といった側面をあつかっている。また末尾にはモンゴル国との文化交流を実践している民間の諸団体のリストを、不十分とはいえ、掲げておいた。いまや、民間と公共との区別はほとんど意味がないように思われる。また、インターネット上では、団体よりもむしろ個人が交流の核となっている。そういう意味では、掲げた瞬間に意味を失いかねない、うたかたのリストであるやもしれぬ。それでも、諸団体のネットワーク化が進み、交流の網の目が縦横無尽に走ることを切望して、

掲載する次第である。

さて、民主化以降、近くて遠い国モンゴルに対する関心が急速に高まり、一種のブームが到来した。すでに幾冊もの入門書がある。それらの中にあつて本書に特徴があるとすれば、執筆者に共通する、ある種の心的態度であろう。賢明なる読者諸氏は、かならずや、どの執筆者からも、そこに生きる人びとを敬愛し、ともに苦悩し、未来を模索する姿を看取されることだろう。

できるだけ多くの読者に、私たちのメッセージを受けとめてほしい。読者諸氏がモンゴルと関わりをもつときの参考にしてほしい。その関係が、観光であれ、援助であれ、ビジネス投資であれ。今後のモンゴルとの関わりをより深く、より長いものにしてゆくことは、私たち日本人の未来にとって決して無関係ではない。良き隣人に恵まれることは、幸せの最大の要件であるからだ。